

東アジア歴史と人の移動プロジェクト 活動の軌跡, 休止, そして「かかわり」の継続

松永稔也, 林俊徳, 蔡松峰, 李秀貞, 玉那覇ももこ

本報告論文は, 2006 年に開設された東海大学日本語文学系碩士班の二年次学生向けの必修課目「活動計画」のプロジェクトの一つである「東アジア歴史と人の移動プロジェクト」の6年あまりの活動内容を報告するものである(学系名は当時). 2012 年より各プロジェクトの活動を実践報告論文として『多元文化交流』に投稿・掲載することが本学系で制度化されたが, ちょうどその年をもって, 本プロジェクトは新規参加希望者の不在のため正式開講課目としての活動をいったん終了することとなった. そのため, 報告論文の執筆はこれまでの活動の「総括」の意味合いも含むものとなり, 結果として, 実践報告論文の紙幅を大幅にこえるものとなってしまった.

このたび, 紀要編集委員会の委員各位の, 学系活動をできるだけ掲載するという方針のおかげで「実践報告内の特別報告」というかたちで掲載を許可していただくことができた. 心より感謝いたします(プロジェクト責任者).

1. はじめに

本論文は, 2006 年に開設された東海大学日本語文学系碩士班の二年次学生向けの必修課目「活動計画」の活動の一つである「東アジア歴史と人の移動プロジェクト(以下, 東アジアプロジェクトと略記)」の 2012 年度までの活動内容を報告するものである.

本論文は, プロジェクト参加者5名によって執筆されている. 固有名詞・専門用語等については, ある程度の表現の統一を心がけたが, それぞれの執筆者の個性により論文全体の文体は不統一の観が強いことは否めない. 学生と教員による協働のひとつのかたちとしてお許しいただけば幸いである. また, 6年あまり継続された活動が 2012 年度末をも

っていったん終了を迎えたことを受けて, これまでの活動の記録をできるだけ残したいという参加者の想いが強くなった結果, 本紀要における「活動報告」論文の紙幅としては異例の長文となってしまった. 合わせてご寛恕いただければ幸いである.

本論文の構成は以下の通りである. 第2節では東アジアプロジェクトの発足の経緯を簡単に紹介し, 続いて, 第3節では2007年から2012年までの6年間の活動の軌跡を紹介する. 第4節では, 2012年度の活動の報告を行う. この第4節は3つの小節から構成されている. 4.1 節では, 台湾および台中における「外籍配偶(台湾国外にルーツを持つ配偶者)」「外籍勞工(外国籍労働者)」の紹介

および台中市内の外国籍住民の集落地・聚集地である第一廣場の紹介を行う。4.2 節では2012年度に行われたプロジェクト活動のうち4つの交流(1)台北地域の外国籍住民の生活・活動を知るツアー(2)台中において「外籍配偶」の支援を行う「台中市新移民家庭福利服務中心」訪問と外籍配偶大使との交流、(3)亞洲大學社会工作學系の主催する「新移民家庭之文化學習與生活成長活動(外国籍住民向けの識字教室)」訪問(4)台湾屏東県水利村で高齢者介護を行うインドネシア人労働者への訪問調査、について詳述する。4.3 節では2012年度の活動の総括を学生、担当教員がそれぞれ行う。最終節となる第5節では、6年あまり続いてきた東アジアプロジェクトが「休止」するのにあたり「プロジェクト活動で目指していたこと」について述べる。

2. 東アジアプロジェクトの発足

東海大學日本語文學系碩士班においては、多元文化の理解および多元文化環境における「交流の実践」が最も重要な研究・教育目標のひとつとして設定されている。その目標のため、主に碩士班2年次以上の学生を対象として「活動計画」という名称の単位が提供されている。學系の課目構成の改定にともない名称等の変更は見られるが、この活動計画は本學系碩士班での活動における3つの大きな領域—言語接触領域、表象文化交流領域、社会溝通領域—から立てられた具体的な活動項目にそって企画・実行されてきた。活動計画では、従来の教育や研究において自明とされてきた「教える側」—「教えられる側」、「研究者」—「被調査者」といった枠を取り外し、教員、学生、地域の人々がそれぞれ主体的に参加し活動すること—

共同作業—を前提としている。計画への参加は、東海大學内に限らず、それぞれの目標にそって広い範囲へ呼びかけられるものである。既存の活動計画への参加はもちろんのこと、学生・教員による新規の活動計画の申請も可能である。活動については、碩士班1年次の必修課目である多元文化実践論の授業内で行われる活動計画紹介によって知ることができる。また、同授業で「翌年度以降の新活動案の提出」が呼びかけられ、学生および一名以上の教員が活動母体となること、それに対する學系の承認によって新しい活動計画が開始されることとなる。

東アジアプロジェクトは、正式名称「東アジア歴史と人の移動プロジェクト」として、2007年9月の活動計画課目の開始とともに発足した活動計画の一つである。活動の開始当初は「2007年から東アジアの冷戦後の歴史を、沖縄、フィリピン、韓国、台湾からどのように記述するかに関して同地域の学生たちで協力して考えながら、特に同地域間での人の移動—フィリピンから他地域への契約労働者の移動—に焦点をあて、彼らが移住先の地域コミュニティと十全な交流が図れるようにさまざまな活動を創出することを意図するプロジェクト」として設定された。筆者としては、「人々を単に「他者として理解する」のではなく、国境で区切られ多くの国々で構成されている東アジア地域を地政学的に捉えながら、その地域に実際に住まう我々が、自らのそして相互に共通の問題としてこの地域の諸問題を提示し、考え、議論し、そしてその「解決」や「対処」を目指して交流することで実際に行動すること」をその活動理念として考えてきた。この活動理念の実現に向けた問題意識は2012年度までの6年間維持されてきたが、そのようななかでも、活動の

具体的な方向性は、参加学生の入れ替わりとともに徐々に変化をしてきた。以下では、2007年から2012年までの6年間の東アジアプロジェクトの活動の軌跡を簡単に紹介したい。

3. 6年間の活動の軌跡

2007 学年度 第1期登録者7名

東アジアプロジェクト正式開講に先立ち、2007年8月15日から8月26日までの日程で、フィリピンの首都マニラ地域および首都圏近郊ブラカン州においてフィリピン・スタディーツアーが実施された。このツアーでは、台湾、韓国、日本、フィリピン、といった東アジア諸国の学生と教員が集い、フィリピンを舞台として東アジア諸国間の歴史・戦争・政治・経済・開発・貧困・人の移動といった諸現象に実際に関わってきた人々(移住労働経験者、児童支援 NGO/NPO の主催者、子どもたち、アジア開発銀行研究員、移住労働に関わる政府系組織 POEA, OWWA, TESDA 等の職員、移住労働者支援 NGO/NPO 関係者)との交流を通して、諸現象の要因の追求あるいはその解決のための方策について議論を行った。同年9月以降の東アジアプロジェクト第1期参加学生はこのツアーの参加者が母体となった。

初年度は、碩士班教員3名と7名の学生という構成で活動を開始した。台中市の復興路教会に所属するフィリピン出身の神父である Antonio Salvania 神父が設立した「外籍勞工」のための支援組織 Pastoral Center for Filipino Migrant Workers Taichung のさまざまな催しへの参加、同センターでのフィリピン出身の「外籍勞工」との討論会、台中市駅前のショッピングモール「第一廣場」周辺を学

生が歩行者視点で撮影した動画をもとにした「地図的認識」に関わるイベント、写真展などを行った。

2008 学年度第2期登録者2名

活動責任教員が筆者のみとなり、第2期の活動が始まった。活動への登録学生は2名となったが、同年碩士班3年次となる第1期の学生たちの協力もあり、前年同様復興路教会および Pastoral Center での活動にも引き続き参加できた。筆者も含め登録参加学生もすべて日本国籍となり、自身の「外国籍住民」としての立場も考えつつ、「東アジアプロジェクトで私たちは何ができるのか」ということが議論の中心となった¹⁾。そのような問いに対する2008年時点での私たちの答えが「タグコン TAGCON (TAichung Global COmmunication Network)」の設立にむけた計画立案と諸活動であった。TAGCON は「主に台湾で生活している移住労働者や外国籍配偶者たちと、立場や国籍をこえた交流の第一歩を築いていく活動を進めていく」ために、短中長期の各目標として(1)人と人とを結びつけるきっかけとしての「多文化」地図作り「外国人の営みが見えてくる・感じられる地図」(2)アーカイブ:「外国籍・外国人」ということばをキーワードに、主に台中の情報を収集、分類、そして公開する「学び」の活動(3)地図、アーカイブなどの成果物をもとに、台湾あるいは世界で活動している組織とのネットワークを形成(4)当事者、活動家、研究者をはじめ多様なアクターたちによる交流会、講演会、インタラクティブな勉強会²⁾(5)台中における人と人との交流のための「場」としての NGO 事務局の立ち上げ、を目指して活動を開始した。2008年の活動では、(1)の地図作製および(2)アーカイブ作成についてはある程度

の成果を出すことができた。TAGCON と称した活動自体は 2009 年以降の東アジアプロジェクトでは強調されることは少なくなってしまうものの、(4)交流会、講演会、インタラクティブな勉強会などは継続されており、その意味で、TAGCON の活動目標は継承されてきたといえる。

2009 年 2 月 3 日～2 月 10 日には、學系同僚教員の支援のおかげもあり第 2 回目となる「フィリピン・スタディ・ツアー」を首都圏マニラ地域にて行うことができた。このツアーでは、学部 1 年次学生や碩士班 1 年次学生も参加し、移住労働者支援組織、日比国際児支援組織、プロテスタント派キリスト教のフィリピン人支援組織³といった NGO/NPO への訪問交流活動や海外フィリピン人労働者関連の政府系機関への訪問調査などを行った。このツアーに限らず、私たちは各活動に際して、事前の勉強会を常に行ってきた。こうした事前準備によって、訪問先での質問の具体化や濃密な交流が可能になり、ツアー実施後に行ったツアー報告会や報告書の作成もより充実したものとなったことを特記しておきたい。

2009 学年度第 3 期登録者 2 名

第 3 期の活動では、南投縣草屯に暮らすベトナム出身の「外籍配偶」とそのご家族との交流が始まった。きっかけは、第 3 期の活動計画授業の登録者の友人の台湾人男性が、もともとベトナム出身の配偶者達と交流を行っており、その男性からの紹介を受けてのことだった。初めての交流は 9 月 27 日に南投草屯の国道 14 号線沿いの小さな麵店にて行われた。東アジアプロジェクトからは碩士班 1, 2 年の学生と筆者の 4 名、対して 8 名もの「外籍配偶」の皆さんとそのお子さんた

ち、また、台中縣烏日鄉溪尾社區發展協會の理事長も交流に参加してくれた。お互いの自己紹介からはじまり、生活の様子などさまざまなことを話すなかで少しずつ緊張もほぐれていった。2009 年 11 月 1 日には、「外籍配偶」の一人である Q さんのお宅を訪問し、たくさんの配偶者の方からベトナム料理の作り方を教わる機会に恵まれた。Q さんの夫君ともお会いした。2010 年 1 月 10 日には Q さんはじめ配偶者とそのご家族総勢 19 名に東海大學まで来ていただき東海大學の散策し、私たちの用意した手作り料理で食事をを行った。また 2010 年 4 月 16 日の草屯訪問の際は、Q さんのご両親、韓国人と結婚し韓国で暮らす Q さんの妹さんとその夫君、東海大學からもいつも以上に多くの教員と学生の参加がありにぎやかな交流となった。「活動計画の意義」「交流の意味」など、明確な方向性を示すことはあいかわらず難しいのだが、とにかく「さまざまな人々の交流の接点を提供する」ことが断続的ながらもできていること、その過程に碩士班の学生たちが精力的、主体的に参加してくれていることに頼もしさを覚えた。6 月 6 日には碩士班 1 年次の学生も含めて 5 回目となる交流を行った。

筆者自身、本活動計画の責任者でありながらも「人生の先輩たち」に囲まれて、勉強させてもらうことばかりであった。家族ぐるみでの交流を通して、筆者も「生きること」の意味を考えるようになっていった。以下、当時の感想を綴った文章をやや長い引用する。

「以前も述べたかもしれませんが、台湾の家族関係(私は、いわゆる台湾人同士が築く家族についてもほとんど知識がない)、台湾の夫婦関係、台湾で生きること、

台湾で外国人が暮らすこと、などなど生活とか人生に関わりの深い事柄についてもっと知りたくなっています。もちろん「研究」「勉強」という側面もあるのですが、同時に「生きているということ」「生きていくということ」はリアルタイムで私松永自身も日々おこなっていることでもあります。これは「生きる術」みたいなことへの関心であり、そのような意味でいうと私のこのぼんやりとした関心事は「学術性に乏しい」のかもしれないし、また「従来通りに学術性を追求すると「無味乾燥」になる」かもしれないし、また「書き手の顔が見える」ものでもあるかもしれないし反面「感想文」のようにもなるかもしれません。今言えることは、「自分の「生」との関わり」「社会の内部に自分も配置した視線」をどのように手に入れ／維持し／忘れないでいられるか、「実感」とか「手触り」のようなものをつねに感じていけるか、こそが大切なのだろうなということ。(筆者ウェブサイトより転載)

2010 学年度第 4 期登録者 1 名

2010 年度は新たに 1 名の学生が参加してくれることとなった。前年度より活動に参加してくれている学生でもありその点は頼もしさを感じるものであった。本年度からは、「交流」に加えて移動に関わる諸現象の「学習」「理論的把握」にもさらに力を入れようということで、台湾、日本のほか、世界中の「移動者」に関する論文・資料を読み議論をすすめる読書会を行うこととなり、2010 年 12 月 18 日には第 1 回目の読書会が開かれた。以降 2012 年度までに、11 回の読書会で 23 本の論文を講読し、また 12 回目からはグローバル化の前提ともなる「ナショナルな

枠組」の理論的把握を目指し、ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』の講読を始めた。

2010 年 12 月 12 日には草屯の Q さんにお邪魔し久々の交流を行った。同日、「外籍配偶」家庭をはじめさまざまな生活環境にある女性を対象として職業技術養成を通して「生きる力」を付けていく活動、コミュニティ形成活動、児童生徒の放課後活動、単親家庭援助などを行っている南投縣愛郷文教協會(外籍配偶關懷據點)を訪問し、当協會での活動についてインタビューを行った。

また、2011 年 4 月 10 日には、Q さん宅にお邪魔するとともに、Q さんのご家族とともに台中縣霧峰にある 921 地震教育園區を訪問した。

2011 学年度第 5 期登録者 2 名

前年に引き続き、読書会は継続されている。新規の登録学生の他、有志の学生も参加してくれており、参加者の多様な出自・経験もふまえて、少人数ながら中身の濃い議論が行われた。

2011 年 8 月 21 日、久々に Q さん宅を訪問した。この日は草屯でベトナム出身女性向けの服飾品や貴金属の取引を行う商店に案内してもらった。筆者が普段目している「外国籍住民の集落地・聚集地」における商業施設とは異なった、市井における人的ネットワークを介した物品や情報の交換の様子を垣間見ることができた。

2012 年 4 月 15 日には台中公園で開かれた「臺中市 101 年東南亞節慶文化活動」に参加し、各国出身の「外籍勞工」および関連する団体・組織の人々との交流を行った。

2012 年 5 月 27 日には、プロジェクトの登録学生および第 6 期の登録学生となる碩士班

1 年生に加え学部生, 卒業生, 学生の友人ら有志 11 名で「台北外国籍の人びとの暮らしをたどるツアー」を行った。午前中は新北市中和區華新街(緬甸街=ビルマ街)を, また午後には, 中山區中山北路三段にある台灣國際勞工協會(TIWA)を訪問した(4.2.1 節にて詳述)。

2012 学年度第 6 期登録者 4 名

2012 年度, 第 6 期生は 4 名と例年に比べてにぎやかなプロジェクトとなった。この年の参加学生からは「外国籍住民に対する印象はどのように形成されるのか。台湾人に(一般的に)共有されているステレオタイプを払拭することは如何に可能か」といった問題意識が挙げられ, 外国籍住民に対するステレオタイプの再検討のための議論の場としてワークショップ形式の会合を開くこと, が目標とされた。2012 年度の活動の具体的な紹介は次節以下に譲るが, 2012 年度のプロジェクトの成果として, 2012 年 12 月 14 日に, 奈良女子大学人間環境研究科中山徹先生とゼミ生の皆さんとともに「社会に関わる研究について考える」との副題を冠して「東アジア歴史と人の移動プロジェクト第 1 回ワークショップ」を行ったことを挙げておきたい。

(松永稔也)

4. 2012 年度の東アジアプロジェクトの取り組み

本節では, 2012 年度の東アジアプロジェクトの活動について紹介する。まず 4.1 節で, 東アジアプロジェクトにおいて主な交流の対象となっている「台湾に暮らす外国籍住民」について紹介する。続く 4.2 節では, 2012 年度のプロジェクトの 4 つの交流活動について紹

介する。4.3 節では, 学生, 担当教員による活動の総括を行う。

4.1. 台湾および台中の外国人について 4.1.1. 「外籍配偶」と呼ばれる東南アジア出身の配偶者

近年, 台湾では多くの外国籍配偶者が生活をしており, その数は年々増加している。2013 年末で約 487000⁴ 人となっている。そのうち, 約 329000 人が中国籍及び香港籍の配偶者で, 約 158000 人がその他の国籍の配偶者となる。外国籍配偶者の男女比率は男性を 1 とすると, 女性は 10 である。本項では, 外国籍配偶者の中で「外籍配偶」⁵ と呼ばれる東南アジアの国籍の女性配偶者のことを述べていく。本来, 「外籍配偶」の意味は外国の籍を擁している配偶者のことを指す言葉だが, 台湾の一般社会ではそれを東南アジア出身の配偶者のこと指して言うことが多い。この「外籍配偶」という言葉は良い意味で呼ばれているわけではなく, どちらかと言えば差別した言い方なのである。台湾における「外籍配偶」は, ①婚姻生活の問題, ②子どもの教育問題, ③家庭内の暴力問題, ④社会における差別問題などさまざまな問題を抱えている。

(1) 婚姻生活の問題

「外籍配偶」が婚姻生活で抱える問題は数多く, 簡単に解決できる問題ではない。言語の問題を始め, 価値観の違い, 配偶者同士の感情問題など, 恋愛ではなく仲介の通しての婚姻が多い「外籍配偶」は, 結婚した後の家庭内での立場は決して公平なものではなく, 始めから軽視されてしまう場合が多い。そこには婚姻に至った目的の違いも存在し, それが差別や家庭内暴力へと繋がっていくケ

ースもあるのだ。台湾で「外籍配偶」と結婚する家庭の多くは経済的に弱く、結婚相手を見つけられずに、子孫を残すために仲介を通して「外籍配偶」と婚姻する場合が主である。それに対して経済的理由で台湾へと来る「外籍配偶」とでは公平な立場にいることは難しいと思う。また、台湾 YAHOO などインターネット上で「外籍配偶」と検索するだけで、数多くの結婚紹介サイトがヒットし、サイト内では直接「外籍配偶」の顔写真を見ながら、相手を選ぶことが出来て、更にはその料金⁶が載っているという場合も多いのである。結婚相手をお金で買ったというイメージ、考えが、その生活に影響を及ぼすことも多いだろう。そこに言語の違いで、うまくコミュニケーションがとれないことも加えると、その生活が如何に大変かが想像できるだろう。台湾の多くの地域には「識字班」が存在し、「外籍配偶」に中国語を教えているが、東アジアプロジェクトで台中亞洲大学の「識字班」を訪問した際にも、「外籍配偶」が「識字班」に通う際に夫からの支持が得られない場合があるという話を聞いた。このようなことからでも、「外籍配偶」が家庭内における地位が低く、多くの問題を抱えていることが分かる。

(2) 子どもの教育問題

教育部によると 2010 年までに、台湾では外国籍配偶者⁷との間に生まれた子どもで、台湾の小中学校へ通っている人数が 17 万 6373 人いる。そのうち東南アジア出身の配偶者の子どもが 10 万 7913 人いて、全体の 61.18% に及ぶ、【図表1⁸】のように少子化の影響で 2004 年から 2010 年までに台湾での小中学生の総数が 40 万人も減少していることが見て分かる⁹。しかし、総数で減少傾向にある学生数も、外国籍配偶者の子女だけを

見ると、2004 年の 46411 人が 2010 年では 176373 人と約 4 倍近くも増えているのである。この数字だけを見ても、外国籍配偶者、特に全体の 61.18% の「外籍配偶」の子女に関する教育が如何に重要で大切かが分かるだろう。この「外籍配偶」の子女は台湾ではよく「新台湾之子¹⁰」とよばれ、この呼称に関しても母親の「外籍配偶」と同じように差別を感じさせる呼ばれ方で、日本や西洋などの外国籍配偶者の子どもはよく「混血児」と呼ばれる。「混血児」は、ハーフの子どもという意味で、本来であれば「新台湾之子」も「混血児」と呼ばれるべきなのだが、これは一般社会だけでなく、マスメディアにおける表現でも用いられている呼称なのである。台湾人と日本人の間の子どものなどはニュースでも「台日混血児」と報道され、東南アジア籍の配偶者の子どもは「新台湾之子」と言うように報道されるのだ。台湾社会の「新台湾之子」に対するイメージとしては、学力が低い、健康が良くない、社会の弱者などと言ったものが多く、その理由は母親が「外籍配偶」だからと言う物が多い。マスメディアでもよく台湾南部の「新台湾之子」は台湾語が話せないのも、子ども達から仲間はずれにされるなどと報道されている¹¹。「新台湾之子」で検索すれば同じような記事が多く見つかるだろう。これらは勉強や台湾語を教えられない母親がいないと言われていたが、もともと経済力が弱い家庭が結婚相手を見つけられずに、「外籍配偶」と結婚するケースが多く、加えて「外籍配偶」が台湾での経済活動はもちろん、台湾社会に馴染む前に求められるのが子どもを生むということでは、当然その子どもの面倒を見ていく準備が出来ているとは言えないだろう。「新台湾之子」の教育問題は「外籍配偶」の問題だけではなく、「外籍配偶」を迎え

る家庭の環境によるところの方が大きいように感じられる。

(3) 家庭内の暴力問題

東アジアプロジェクトでは、2012年の9月から2013年の8月までの一年間で「外籍配偶」を支援する多くの民間機関を訪問してきた。その訪問先の1つ台中市北屯にある「新移民家庭服務中心¹²⁾」を訪問した際に、「外籍配偶」が台湾の家庭内で暴力を受けやすい傾向があるという話を聞いた。助けを求め場所がないことや、暴力から避難する実家が台湾にはなく、孤立無援の状態になる「外籍配偶」も少なくないということだった。一番の問題はやはり言語で、暴力を受けたと訴えたくても、言葉が通じず助けを求められないことや、経済的な理由で逃げる事が出来ないなどで、夫婦間でトラブルが起きた際に、自分たちで解決するのは難しいということである。台中亞洲大学の「識字班」を訪問した際も同じような話を聞くことが出来た。その他のさまざまな「外籍配偶」を支援する団体の関係者からも「外籍配偶」は台湾家庭内では夫の暴力に耐えるしかない状態が多く、その理由としてはもともとの立場が弱いこともあれば、台湾で自立していけないということが挙げられる。内政部戸政司の統計資料でも、外国籍配偶者の生活費などの金銭面を70.8%が台湾人の配偶者より得ているという現実がある。「外籍配偶」もその例外ではないだろう。例え離婚したとしても、子どもの親権を得るのも難しく、環境面ばかりでなく、法律面でも「外籍配偶」にとっては、我慢を強いられるのが現状であると勵馨基金會龍山婦女服務中心主任も述べている¹³⁾。また【図表2】を見ても分かるように2013年では「外籍配偶」の婚姻件数と離婚件数がほぼ同じ

件数である。内政部入出国及移民署統計資料によると「外籍配偶」の婚姻件数は2001年から2013年まで、累計12万7770件となっており、その期間での離婚件数は累計4万7163件となっている¹⁴⁾。この数字を見ると3分の1もの「外籍配偶」が離婚したことになる。全てが家庭内暴力によつての離婚ではないだろうが、その影響も大きいと思わざるを得ない。

(4) 社会における差別問題

これまで述べた問題からでも、「外籍配偶」が台湾社会における立場が決して良い物ではないことが分かる。日本や韓国からの配偶者は「日本媳婦」、「韓国媳婦」という別の呼び名で呼ばれ、その子どもは「台日混血兒」、「台韓混血兒」と呼ばれていることと比べてもそれは明白なことであろう。「不要叫我外籍新娘」(夏曉鶻 2005)でも書かれているように、「外籍配偶」は家庭内においては立場が低く、ただの労働力として扱われる場合もあり、社会的支持も少なく、離婚した際には強制帰国というような扱いである。子どもの親権に関しても、その権利が台湾籍の夫側にあるのだ。「新台湾之子」と呼ばれる子どもや、「外勞¹⁵⁾」と呼ばれる外国籍労働者も台湾社会においては、まだまだ悪いイメージを持たれているのだ。これは最近のニュースや記事からでも分かることで、檢察官が「台北車站被外勞攻陷¹⁶⁾」とするコメントなど、台中の第一廣場にしても台中に住む多くの台湾人の目から見ると東南アジアの人に占拠された場所という。「外籍配偶」を取り巻く環境はまだまだ厳しいものと思える。

(5) 参考文献

夏曉鵬(2005)『不要叫我外籍新娘』左岸文化出版社

教育部(2010)「外籍配偶子女就讀國中小人數分布概況統計」

参考ウェブサイト

内政部戶政司

http://www.ris.gov.tw/zh_TW/346

内政部入出国及移民署統計資料

<http://www.immigration.gov.tw/lp.asp?ctNo=29699&CtUnit=16434&BaseDSD=7&mp=1>

(林俊徳)

4.1.2. 「外籍勞工」と呼ばれる東南アジア出身の労働者

(1) 「外籍勞工」の導入

台湾における外国籍労働者数は年々増加しており、2013年末には48万9000人に達した。外国籍労働者は、「外国専門人員(ホワイトカラー)」と「外籍勞工(ブルーカラー)」に大きく分類され、外国籍労働者の大半が「外籍勞工」である。「外籍勞工」は、主に産業労働者と福祉労働者を指す。産業労働者とは、製造業や農業・林業・漁業・牧場(船員)などに従事する者を言う。また、産業労働者の中でも多くが製造業に従事している。また、福祉労働者は介護職と家事労働の二つに分類され、介護職従事者が大半を占めている。

台湾の外国籍労働者導入の経緯をみてみよう。金戸(2009)によると、台湾では1970年代以降、1980年代後半に産業構造の転換が完了する以前に労働人口が大幅に減少した。サービス業が拡大する一方、教育の普及や国民の総中流化に伴う社会的価値観の変化によって労働力集約型産業が敬遠されるようになった。また、明石(2010)によると、特

定の国から特定の分野における「外籍勞工」を正面から受け入れることで、人手不足への対応を試みた台湾政府は、1989年の段階で公的事業を支える労働力の諸外国からの導入を決定し、その後は民間にも開放し、1992年には社会福祉分野での受け入れを認めた。

(2) 外国籍労働者数

台湾内政部は、2013年末における中華民国(台湾)に滞在する外国人(中国大陸出身者は含まれない)が72万5000人であったと発表した。外国人滞在者の中で外国籍労働者は、48万9000人と最も多く、全体の67.5%を占めた。(主に桃園県、新北市、台中市に居住)また、外国籍配偶者(中華民国の国籍未取得)も4万1000人おり、全体の5.7%であり(主に新北市、桃園県、台北市に居住)、両者の総数は台湾に滞在する外国人の73%を占めている。さらに、外国籍労働者と配偶者の多くが東南アジア籍であり、実に98%を占めている。昨年末より4万4000人増加し、9.8%も増加している。外国籍労働者の中でも、インドネシア籍が全体の43.6%、ベトナム籍が25.6%、フィリピン籍が18.2%で比較的多かった。昨年末と比較した際、ベトナム籍が2万5000人増、インドネシア籍が2万2000人増と変動が比較的大きかった¹⁷(【図表3】参照)。

(3) 台中の「外籍勞工」

【図表4】を見ると、特に「外籍勞工」の受け入れの多い都市は、桃園県の8万2666人、次いで新北市の6万9703人となっている。では、台中市の外国籍労働者数はどうだろうか。台中市は、2012年の6万1185人¹⁸から約6000人増加し、2013年末には6万7274

人と台湾第三位の外国籍労働者数であった。台中では、特に製造業の受け入れが 4 万 4047 人(65.5%)と多く、次いで介護職の 2 万 2631 人(33.5%)となっており、この二つだけで全体の 99.1%を占めている。台中市は、桃園県、新北市に次いで第三位の受け入れ人数である為、台湾の中でも外国籍労働者の受け入れの多い都市であると言える。

(4) 台中における東南アジア各国出身者の人数

台中は、台湾で第三位の外国籍労働者数である。その中でも特にインドネシア、ベトナム、フィリピン、タイの国籍が 99.9%を占めている。また受け入れ人数は、インドネシア籍 2 万 4101 人、ベトナム籍 2 万 2802 人、フィリピン籍 9973 人、タイ籍 1 万 398 人となっている(【図表5】参照)。

以上の(3)や(4)で述べた様に台中は多くの外国籍労働者が居住しているにも関わらず、TIWA の様に外国籍労働者の相談やケアなどを行える NGO・NPO が無いのが現

状である。第一廣場の様と同郷者同士での相談し合える場所や憩いの場所がある事も必要である。しかし、雇い主との間に生じた問題の解決は困難だと思われる。TIWA では、雇い主との間にも介入し、問題が生じた際の手助けも行っていった。このように、当事者である外国籍労働者だけでなく、ホスト国として台湾人による介入は必要不可欠であると言える。しかし、台中にはこの様に雇い主との間に直接介入し、何かしら困った事が起きた場合に相談・交渉を行える NGO・NPO が存在しないのである。

(5) 「外籍勞工」の集まる台中・『第一廣場』

① 第一廣場とは

第一廣場は、台中駅から徒歩5分ほどの場所に位置する雑居ビルである。そこは、平日に訪れると、一見店が開店しているか疑ってしまうほど客足は少ない。しかし、土日(特に日曜日)となると平日とは打って変わり、多くの人で溢れかえっている。買い物を楽しむ者やギターを弾きながらお酒を友人同士で飲み交わす者、友人同士でお喋りをする者、買い物帰りにバスを待つ者など様々だ。しかし、第一廣場に集ってくる者の大半が台湾の地元住民ではなく、台湾へ出稼ぎとして訪れた「外籍勞工」と呼ばれる人々である。第一廣場には、タイ・ベトナム・インドネシア・フィリピンなど東南アジアの輸入品や食べ物が多く販売されている。その為、商品のほとんどが現地の言語で表記されており、外国から出稼ぎに来た者にとっては生活上に必要な物を購入できる場所と言える。また、同じ商品ではあるが言語と絵柄のみ異なる商品も陳列されている点も興味深い。現在の第一廣場は、このように「外籍勞工」の生活必需品



ム、フィリピン、タイの国籍が 99.9%を占めている。また受け入れ人数は、インドネシア籍 2 万 4101 人、ベトナム籍 2 万 2802 人、フィリピン籍 9973 人、タイ籍 1 万 398 人となっている(【図表5】参照)。

を購入する場所だけではなく憩いの場となっているが、以前は台湾人向けの市場や商業施設であった。

②第一廣場の歴史

第一廣場は、日本統治時代には第一消費市場であった。1908年に消費市場として開設し、小売市場として魚、肉、野菜、果物など日用必需品が販売された。1978年に火事が起こり半分焼失された。1987年によろやく改築に着手、1990年11月28日に完成、1991年2月より営業を開始した(白, 2009)。1990年に商業施設としての第一廣場が誕生した。

1995年にレストラン火事、1999年の九二一大地震を経て台湾人客が減少した。第一廣場吏員会や関係者は景気を回復する方法を詮索したところ、移住労働者が第一廣場付近に集まっていることに啓発され、移住労働者向けの商売を始めた(白, 2009:35)。

③第一廣場を訪れた人々との会話¹⁹

第一廣場には、様々な理由で外国籍労働者が集まっている。数人に話を伺っただけでも理由は様々であり、一遍からは見ることは出来ない。興味深かった点は、第一廣場を知った理由で、情報誌で第一廣場を知り、訪れた者がいた。これまで友人伝えで第一廣場を知る者はいたが、情報誌で紹介されている事について初めて知ったからだ。また、なぜ台湾の一般のスーパーやデパートなどを利用しないのかについて聞くと、どこにあるのか知らないという者や、一般のスーパーやデパートに比べ第一廣場には必要な品が既に揃っているからという声もあった。

以下、お話を伺った方について箇条書きではあるが、まとめる。

・本国でも友人であり、第一廣場には友人と再会する為に桃園から訪れた者。

・同郷であるが知り合いではなく、第一廣場で出会い、共にバスを待っている。

・台湾に再入国を繰り返し、10年ほど働いているため台湾語が堪能な者。

・台湾は1度目であり、中国語は少ししか話せない者。

・本国に子どもを残し、介護職をしている者。

・子連れの台湾人男性と結婚し、第一廣場内で店を構えている者。

話を伺う中で、やはり異国同郷者を求めて、或は懐かしさを求めて第一廣場に集まっているのではないかと考える。



ベトナムの料理で、バナナの中にお米が詰まった食べ物をご馳走してくれた。

(6) 参考文献 (年代順)

伊豫谷登士翁(2001)『グローバリゼーションと移民』 有信堂高文社

白春燕(2009)「第一廣場の変遷」 蔡薰婕ら『「移動」の時代と街づくり～台中・奈良・大連～交流討論會會議文集』 東海大學日本語文學系

明石純一(2010)「台湾における外国籍労働者政策の変遷と課題」石弘之ら『外国人労働者問題をめぐる資料集』 笹川平和財団

金戸幸子(2010)「台湾における多文化社会の展開と「新移民」問題」 永野武編『チャイニーズネスとトランスナショナル・アイデンティティ』 明石書店

(玉那覇ももこ)

4.2. 2012 年度の活動報告

4.2.1. 台北 外国籍の人びとの暮らしをたどるツアー

本節では『台北外国籍の人びとの暮らしをたどるツアー』について紹介する。

このツアーは筆者が担当する東海大学日本語文化学系碩土班の授業「移動與溝通」と「東アジアプロジェクト」との合同企画として 2012 年 5 月 27 日に行われた。主な訪問地は、新北市中和區、MRT 南勢角站にある華新街(緬甸街:ビルマ街)および、台北市中山區にある台灣國際勞工協會の 2 カ所である。ツアー実施にあたり、東海大学から、「課外の引率・領導を伴う活動」として補助金が提供された。

本ツアーでは、東アジアプロジェクト第 5 期生の 2 名の 2 年生に加えて、第 6 期のメンバーとなる 4 名の 1 年生とその友人 1 名、日本語文化学系の学部生 1 名、卒業生 2 名も参加してくれたため、大変にぎやかなツアーとなった。以下、ツアーの様子を紹介する。

朝 8 時半に台中朝馬のバスターミナルに集合し員バスに乗り込む。10 時半過ぎに台北に到着。全メンバーが合流、自己紹介などをすませて、そのまま、MRT(捷運)中和線に乗り南勢角にて下車し、駅から徒歩 20 分ほどのところにある華新街に向かう。南勢角駅の地名指示には華新街(緬甸街)Burmese St. との表記が見られた。華新街は、250 メートルほどの道路を挟む両側に商店が建ち並ぶ通りによって形成されている。通りの入り口に

は仏塔を模した門と「南洋観光美食街」の文字が見られる(写真 1)。



写真 1

筆者がこれまで訪問してきた台湾各地の多くの集落地・聚集地が自然発生的に形成され維持されているなかで、集落地・聚集地を「観光地」として明確に位置づけ訪問者に街の存在価値を示そうとする姿勢が強く感じられる景観であった。街のあちこちにビルマの文字とともに中文が見られることから、ホスト社会へ向けた情報伝達が意識されていることがわかる(写真 2)。



写真 2

雲南(大陸中国とタイ・ビルマ地域の国境付近)のイスラム者向けのレストランも見られた(写真 3)。



写真 3

「李園清真小吃」の上・下部にはアラビア文字らしき表記が見られる。「清真」が「イスラム」を表している。商店の看板以外にも例えば壁の張り紙なども「多言語景観」の一部を形成している(写真 4)。



写真 4

このような複数言語併記にはエスニックコミュニティと主流コミュニティのあいだの「ゲスト-ホスト関係」や「言語間の地位」など言語の政治的位置づけが透けて見えるほか、ビルマ・タイ・中国の国境地帯の言語・文化・宗教的多様性が空間を越えて、台北首都圏に越境的に示されていて大変に興味深い。

午後 2 時ごろ、中山北路三段にある台湾国際勞工協會 (TIWA: Taiwan International Worker's Association) に到着した。TIWA のスタッフのお二人とともに、協働する海外フィ

リピン人労働者組織 KASAPI のメンバーが迎えてくれた。まずは、ツアーメンバーと KASAPI のメンバーが混合で 3 つの小グループを作り中山北路の「フィリピン街」を見学するミニツアーを行い(写真 5)、その後、近所の公園で TIWA のメンバーも交えディスカッション、質疑応答を行った(写真 6)。



写真 5



写真 6

公園でのディスカッションでは外籍勞工の抱えているさまざまな問題・困難について教えられた。外籍勞工の多くは、労働者に雇用先を斡旋する仲介業者の仲介を受けている。仲介料 (placement fee) は給与の 1 ヶ月分と定められているが、実際には、海外フィリピン人労働者 (OFW: Overseas Filipino Workers) たちは、フィリピン国内の仲介業者に法定額以上の多額の仲介料を払っている。例えば 2012 年 1 月 1 日より台湾の最低賃金は月額

18780 元となり、多くの外籍勞工がこの金額を基本賃金として受け取っている。これはフィリピンペソ換算で 26200 ペソであるが、実際には多くの労働者が 10 万ペソ以上の仲介費をフィリピンの仲介業者に支払っている。また、受け入れ国である台湾にも仲介業者(労働者管理業)がいる。こちらではサービス費 service fee として毎月 1800 元を労働者から徴収している(2 年目は 1700 元/月、3 年目には 1500 元/月となる)。KASAPI のメンバー曰く、このサービス費支払いでいったいどんな「サービス」が提供されているのか、わからないとのことであった。

TIWA の組織運営についても話を聞くことができた。TIWA では、外籍勞工と台湾の各コミュニティとの交流の促進、外籍勞工の労働環境の改善、労働者の福利厚生や權益拡大等のために、台湾の労働者団体との協働で行うデモ活動やロビー活動、ドキュメンタリー映像の作成、会報の発行、労働者のための情報の発信、不当労働に耐えられなくなった外籍勞工が身を隠すためのシェルターの運営等、さまざまな取り組みを行っている。TIWA は寄付金および「プロジェクト申請」によって組織運営がなされている。「プロジェクト」とは、政府関連や民間基金等のプロジェクト公募に応募し採用された場合に一定の補助金を得るという組織運営の手法である。例えば中三北路三段周辺の外国籍住民の集落地・集落地の紹介パンフレットである「中山拜拜」や TIWA の会報の一部も「プロジェクト」の資金を利用して作成されている。

TIWA のメンバーとの交流時間は当初は 2 時間半ほどの予定だったが、結果として 4 時間ほどの時間を割いていただいた。このツアーでは、実際に街で暮らす人々とお話することを通して、台湾の首都である台北に

おける集落地・集落地景観について、また外籍勞工について、より具体的に知ることができた。筆者は、これ以降、KASAPI のメンバーたちと facebook 等を通して交流を継続しており、デモ行進などの活動にもたびたび参加させてもらっている。KASAPI のメンバーのひとり、宜蘭で老人介護の仕事しながら、月に一度しかないという休日の多くを TIWA、KASAPI での活動に使っている。

出身や年齢、あるいは労働条件等の大きな違いを超えて、台湾で働く外国籍労働者として筆者に対しても暖かく接してくれていることに感謝したい²⁰。

(松永稔也)

4. 2. 2. 台中市新移民福利服務中心

(1) 訪問先：台中市新移民福利服務中心



台湾で暮らしている外国人、特に東南アジア出身者のあり方は大きく「外籍配偶」と「外籍勞工」で分けることができる。特に東海大学が属している台中で暮らしている外国人の数は 2012 年 10 月現在、合計 4 万 8549 人に上り、その内、3 万 2574 名の中国籍が最大で、特に「外籍配偶」と呼ばれる人の数はベトナム籍が 8909 名、インドネシア籍が 2095 名、タイ籍が 776 名、フィリピン籍が 44 名の人たちが台中市で生活をしている。特に年々増加する「外籍配偶」、その中でも花嫁である「外籍新娘」の数は農村地域や工場地域

の結婚問題を解決した大きな役割を果たした反面、彼女らの台湾での生活のさまざまな苦しみや苦情が今は社会問題になっているのも事実である。その理由で台湾市政府は台中市内で「外籍配偶」の生活を支援するため4箇所のサービスセンター(支援センター)を設立し、彼女らの生活をサポートしている。

(2) 訪問目的



私たちが参加している東アジアプロジェクトでは校外活動として前回まで訪問した場所は主に「外籍勞工」を中心とした施設および場所であった。台中市では前も述べたように、「外籍配偶」の生活をサポートするために市内で4ヶ所の支援センターを設けている。それは北屯区の「台中市新移民福利服務中心」、大甲区の「台中市海線新移民家庭服務中心」、豊原区の「台中市山線新移民家庭服務中心」、大里区の「台中市大屯區新移民家庭服務中心」である。今回私たちが訪問した施設は北屯区の「台中市新移民福利服務中心」である。また、台中市で生活している多くの「外籍配偶」が実際どのような生活上の苦しみや悩みがあるかを知り、このサービスセンターが彼女らのためにどのような形で役割を果たしているか、またそれが台中市の多文化共

生にどのような影響を及ぼしているかを知る事が今回訪問の目的である。

(3) 訪問先のインタビュー内容

東アジアプロジェクトの参加者である私たちは2012年11月02日、三回目の校外活動の一環として台中市北屯区にある「台中市新移民福利服務中心」を訪問した。約二時間の時間を利用して職員である張燦芬さんの案内で施設内の説明や、この施設が行っている活動、また台中市内の状況などを説明してもらった²¹。施設は市内と言っても賑やかな処からちょっと離れた場所にあった。そのせいか、施設内には利用者が少なかった。



説明後、張さんは私たちのために特別にお越しになった二人の新移民の方を紹介してくれた。インドネシア出身の「陳さん」(左)ベトナム出身の「阮さん」(右)であった。台湾に嫁いで10年、15年になるお二人は、今は台中市政府の通訳として活躍している文化大使である。お話を聞くと、「陳さん」と「阮さん」は最初台湾に来た時は中国語が全然話せなかった状態で、ちょうどあの頃から台湾で始まった一般小学校での「外籍配偶」のための無料中国語講座に通いながら中国語を学んだと言う。週3回2時間の授業を受け、子供がいる場合は子供も連れて行ったりしながら勉強を続けていると言う。今は台中市政府の大使であるお二人の主な仕事は、さまざまな状況で通訳の仕事を行ったり、色々

な場所で自国の文化を台湾人に伝えたり、紹介したりすることである。それが今台湾社会で存在している「外籍配偶」に対する「偏見」を無くすためであり、この仕事は自分が最初に台湾に来た時と同じように苦勞している今の若い「外籍配偶」たちを助ける方法でもある理由もあり、この大使の仕事を受けたと言う。

(4) 新移民多元図書館

このセンターの二階には「新移民多元図書館」がある。この新移民多元図書館は多国籍対応の図書館だ。具体的に言うと、中には韓国語、中国語、日本語、タイ語、インドネシア語など普通の図書館にはない言語の本が置いてあるのだ。無論、他の大規模な図書館にも多言語を対応した本もある。しかし本格的に多くの国の方々を対象としての図書館は、ここが台湾で初めてだと、局員が誇りに満ちた顔で言った。

この図書館を成立したきっかけは、外国の空港にある図書館だそうだ。それらの図書館は、各地から来る客のためにあらゆる言語の本が置かれていた。あらゆる国籍の新移民のためにあるこのサービスセンターもこのような彼らのための本を置くべきだと思い、この図書館を作ったそうだ。そのほか、この図書館は専用車で各新移民の家庭を訪問し、その家庭の言語にあう本を紹介するサービスもやっている。もし子供が気に入った本があれば、贈る事ができる本も用意している。

以上のように、家庭への相談サービスだけでなく、知識の提供も手助けする図書館の存在。表面の支援だけでなく、もっと深いところまで考えたサービス。このサービスセンタ

ーは本当にしっかりとした考えと意識がバックボーンとなっている証拠だろう。

(5) まとめ

今回筆者が「台中市海線新移民家庭服務中心」を訪問したのは本プロジェクトのメンバーとして尋ねたが、筆者も台湾では一人の「外籍配偶」である。しかし、この施設の存在を筆者を含め、筆者の友人は存在さえ知らなかった。もっと積極的な宣伝が必要だと思う。また、実は台湾では東南アジアだけではなく、世界色々な国から「外籍配偶」として台湾に来る。しかしながら台湾政府も、台湾に生活している人たちも東南アジア出身からの「外籍配偶」を特別に管理している。もちろん数が比べられないほど多いことも原因であり、理由の一つであるのは分かるが、それが逆に社会内の偏見を固める原因にもなる可能性があると考える。

(蔡松峰、李秀貞)

4.2.3. 亞洲大學識字班

(1) 訪問先：亞洲大學識字班



2012年11月30日、東アジアプロジェクトの4番目の公式的な校外活動が行われた。前回の活動に続いて今回も台中に暮らしている「外籍配偶」の支援場所の一つである亞洲大學の「識字班」を訪問した。

(2) 訪問目的



前回訪問した「台中市海線新移民家庭服務中心」では実際に台湾生活で一番必要である言語教育などは行っていなかった。それで今回の活動は「外籍配偶」が無料で参加できる言語教育はどのような場所で、どのような雰囲気、どのような形で行われているかを知るためが今回の訪問の目的であり、実際に彼女らと接触し学習の感想などを聞くチャンスにもなるのを希望とした。

今回私たちが訪問した「識字班」は亞洲大學の社會工作學系の教育課程の一環として行われてから3年目になる(訪問した当時)。授業や教材にかかる資金は台中市政府の出所幅金から運営されているそうである。今学期の授業は毎週金曜日の夜7:00～9:00まで2時間にわたって30分が一つのクラスで、一日三つのクラスを教室移動しながら行われているそうである。この日、私たちが参観したクラスは7時半から8時半まで行われている「読み方を習うクラス」と、「台湾の歌を習うクラス」であった。特に「読み方のクラス」は多くの「外籍配偶」が中国語教育を受けたことがないため、生活上で耳にしている習った中国語が話せるが読めない、書けないため用意されたクラスだそうだ。

(3) 訪問先のインタビュー内容

以下は私たちが行く前に用意した質問とそれの答えである。

・亞洲大學の識字班とどのような政府単位と、どのように関係しているか。

資金は台中市政府からの補助金をもらっている。その資金の元になるのは逮捕されない範囲内の犯罪を起こした人からの罰金からである。また、亞洲大學が属している「大屯」は小さい町で人口も少ないため、近所の「大里區」と連携して情報などをシェアしている。

・学生となる「外籍配偶」の中国語のレベルは？

学生が授業に参加する主な理由は「台湾国籍取得」や「コミュニティ形成」のためである。実際に台湾に来てかなり生活の経験がある人が多いため、まったく話せない人は少ない。ただ、ここで暮らした期間の差はあるため、中国語レベルはばらばらである。また、中国語は話せるが読めない、書けない人が多いため読み方を教えている。

・学生の年齢、国籍、人数などの統計資料は？また、韓国人の学生の有無？

一番多いのが「ベトナム」で、それに続いて「インドネシア」、「フィリピン」、「中国」、「カンボジア」の出身者である。韓国人や日本人、アメリカ人の学生はいない。

・識字班で2012年に使われている教材の内容はどのような形で作られているか？

この識字班で使われている教材は毎年学生の希望によって更新を行っている。今回は法律に関する内容を希望したため、法律に関する言葉を中心に作った。

・この学校が運営されていることに対して学校周辺の台湾人の認識(偏見の有無)?

周辺の偏見は特にはない。またここに通っている外国籍配偶者たちの台湾人配偶者や家族も応援してくれている。

平日に行われている授業で短い時間しか参加できなくて、授業が行われている間を利用し、授業をサポートしている学生(亞洲大學の社會工作學系の生徒)に個人的にこの識字班について色々質問をした。まず、識字班の宣言方法については、子供の学校からのお知らせや、ホームページなどでの宣言の方法もあるものの、この識字班に通っている学生からの口コミが一番効果があるらしい。前にも述べたようにここに通っている主な理由は「台湾国籍取得」や「コミュニティ形成」である。その中でも同郷の人を会い難い環境で暮らしている「外籍配偶」はこの識字班の場所を利用して自分たちのコミュニティを形成させていくらしい。また、結婚生活や異国生活での悩みなどの相談もここで行われているが、相談者が学生のため、詳しいところまでは相談ができないと言う。ただし、家庭暴力に対しては学校の活動分野の一つになっているため、彼女らと積極的に取り組んで解決方法を探していると言う。最後になぜこの学校に「台湾国籍取得」のため通っているかを聞くと、台湾に帰化するためには台湾内政府が開設している課程に国語課程を72時間以上参加した証明書が必要であるため、ここに通っていると言う。

(4) まとめ

亞洲大學の識字班の経験は2012年まで3年目になる。しかし、その授業現場を見ると、

中国語学習対象である筆者からの目でもかなりの差を感じた。まず、彼女らが授業に参加できるように託児活動を行ったりするのはいい方法であるが、内容面は専門性が必要だと思った。この授業を行われている社會工作學系は教育分野ではないため、授業の方法はともかく内容面で受講者のニーズにどのくらい答えられたか疑問を感じた。また、学生が授業の主な役割を果たしているため、実は長い経験者がいない。それはこの授業が場合によっては実習の形になる可能性があると感じた。教育学科との連携を通して、もっと専門的な授業内容を設けたら、彼女らに中国語を勉強する楽しみを感じれる場所になりそうな気がした。

(李秀貞)

4.2.4. 看護労働者、アティさんへのインタビュー

(1) はじめに

台湾がブルーカラーの外国籍労働者(以下の外国籍労働者は全部ブルーカラーを指す)を輸入する政策を取りはじめたのは、1989年のことだ。そして2014年の今、専門技術を必要としない産業やサービス業の中心に、外国籍労働者の姿はもはや珍しいものではない。その外国籍労働者の姿が見える職種の中の一つには、家庭介護がある。

【図表6】が示すように、台湾の人口構成は少子高齢化である。子供だけでなく、老人たちを世話する人手の要求が増え続けている。だが、発展途上国の台湾では老人に人手をまわす余裕はない一般家庭も多い。これによって、家庭介護を必要としている環境が出来上がっているのだ。そして、台湾がこの状況に対応する方法の一つは、外国人介護である。

東アジアプロジェクトは今まで各種外国籍労働者の資料を集め、討論し、研究してきた。そして今回は実際に仕事場所に訪問して、働く本人をインタビューし、仕事環境を自分の目で見ることに。言わば、実地調査だ。

(2) 訪問先：台湾屏東県 水利村

屏東県は台湾の南に位置している。水利村はその屏東県に属している場所だ。海を隣にしている田舎であり、住民は漁業を主な産業にしている。

(3) インタビュー対象について

- ・名前:アティ 性別:女性
- ・年齢:27歳 国籍:インドネシア
- ・仕事内容:介護対象の三食作り、移動の補助、入浴の手助けなど生活上の補助
- ・介護相手:自力で生きるには障害が伴う老人、約九十歳、筆者の祖父
- ・備考:中国語によるコミュニケーション可能、今の介護の仕事は五年目となる

(4) 調査の流れとインタビュー

i. 調査の流れと対象の仕事環境

- ・実地調査の過程:職場周辺の環境を散策した後、本人にインタビューする。
- ・インタビュー対象の就業環境:一人暮らしの老人の家、人間が快適に住む機能や設備は一通りそろっている。三食、水電気などの費用は雇い主が持つ。自室を持っていて、中もタンスなどの家具がそろっており、クーラーや扇風機つき。

ii. インタビュー

以下はアティさんへの質問と回答の一部である。個人的なプロフィールに関わる質問と回答は省いてある。

Q1:近くに同じ仕事をしている方がいますか？

A1:はい、同じ介護労働者の友達が7人ぐらいいます。

Q2:休みはどうしていますか？

A2:高雄のインドネシア籍の労働者たちが集まる場所にお出かけし、買い物や食事などをします。

Q3:中国語はどうやって習得したのですか？また役に立っていますか？

A3:台湾に来る前に3ヶ月の中国語の授業を受けました。しかし、実際に介護をされている多くのお年寄りには中国語が話せない場合が多いので、介護の場合はあまり役に立てません。結局台湾に来てからまた台湾語を学ぶしかありません。

Q4:介護者として台湾に来るのは多数の手続きがあると聞いています。それらをどうやってクリアしたのですか？

A4:仲介業者に依頼しました。

Q5:仲介業者の費用は高いと聞いています。どうして仲介業者に頼んだのですか？

A5:手続きが大変で、首都で手続きをする間の手間や費用を考えると仲介業者に任せの方がいいからです。

iii. インタビュー内容の解説

Q1について:

台湾屏東県の水利村の人口は約2400人。その内家庭は約750戸。実際そこに住んでいた筆者に言わせてもらうと、一家に一人の老人がいる状況だ。アティさんの話から計算

すると、少なくとも 100 戸の家庭に一人の外国人介護者がいるということになる。多くはないが、珍しくもないということだろう。

台湾大学の社会工作学系の教授林萬億は 2011 年に、台湾は最も外国籍労働者の人数と比率が高い国であるという発言をしている。この言葉は外国人介護者が存在するのは珍しくないという状況の裏付けになるのだろう。

Q2 について:

活動の当日、メンバーは帰り道で高雄駅の周りを回った。その途中、外国籍労働者や、店などを見つけることが出来た。アティさんが来たところがここではないかは分からないが、中には小規模なデパートもあった。容姿から判断すると店員は東アジア系の人間、客も東アジア系の人間が中心だ。高雄は首都の台北の次に大きい都市だ。この都市の交通の主要の駅で外国籍労働者向けの店の数々があるということは、外国籍労働者もはや台湾社会の中心の一部ということだろう。

Q3 について:

アティさんが筆者と雇い主である筆者の両親と話す時は中国語だ。この状況から見ると、アティさんにとって中国語はむしろ雇い主とコミュニケーション、それから台湾の土地そのものに馴染むためにあるとあって良いだろう。

アティさんはせっかく学んだ中国語が仕事現場に役に立たないという状況は、介護対象が老人の場合、実は珍しくはない。何故なら現在台湾の老人は日本統治時代の教育を受けた人間が多い。後の学習がなければ、中国語が話せないことは良くあることだ。筆者の祖父も日本統治時代の教育を受けた人間で、中国語は上手くない。主に話す言葉

は台湾語だ、日本語も話すことが出来るのだ。

推測では、せっかく学んだ中国語が仕事現場に役に立たないという状況は時間が経っていくほど少なくなると思う。ゆえにこれは現段階の問題の一つであるが、時間が解決できるものだ。

Q4 と Q5 について:

これについてプロジェクトメンバーの一人の感想文を引用しようと思う。

「以前 TIWA でお話を伺ったフィリピンからの在宅介護の方たちも、仲介業者に多額の仲介料を取られており、それに対して変だと思っている印象だった。しかし、アティさんはまた仲介業者を使って台湾に来ると言っていた。高い仲介料を払う事に対して疑問に思わないのは何故なのだろうか。アティさんと TIWA でお話を伺ったフィリピン介護士との違いは何だろう…と考えてみた。考えた結果、情報量の差ではないかと思った。TIWA の様な NGO から情報が入る事によって仲介料が高額だと思うのではないだろうか。もしも情報が無ければ変だと思える事もなく、アティさんの様にまた仲介業者を使って台湾に来る事を選択するのではないだろうか。アティさんは確かこの時、なぜ仲介業者を使用するのかについて「手続きが大変で、首都で手続きをする間の手間や費用を考えると仲介業者に任せた方がいい」と言っていたと思う。もし、アティさんに仲介料が法律違反であることを伝える人がいたのなら、もしかしたら仲介業者を使う事を考えないかもしれない。しかし、インドネシアでの手続きに必要な費用を工面できないために台湾での「後払

い」は便利と思うのかもしれない。また、周りの人々も同様の条件で来ているため、台湾での法律で定められた規定など知らない可能性もある。高額な仲介料を要求する仲介業者は絶対に許せない。しかしながら、悪徳仲介業者の存在を知っているながらも放置している台湾政府、インドネシア政府も許せない。誰の為に決めた法律なのだろうか」

この文の中で、なぜ悪徳仲介者を放置しているのだろうかというところだが、根本的な問題は、台湾は外国籍労働者を見下しているからだと思う。

台湾の外国籍労働者に関わるニュースは、少なくはない。だが、報道するニュースはほとんど悪いニュースだ。その結果、外国籍労働者の犯罪率は台湾人自身よりも下にもかかわらず、一般民衆は外国籍労働者を犯罪予備軍として認識している。つられて、外国籍労働者を台湾に寄生している悪蟲どもだという認識しているものもある。台湾大衆の認識がこんな感じだから、民衆は悪徳仲介者への関心が少ない、政府も腰を上げることはない。この悪徳仲介者の問題を台湾から解決するのは、難しいことだ。

(5) まとめ

i. メンバーの感想

なかなか経験にいい経験をさせてもらい、いい経験にはなったが、アティさんの雇用者である筆者の両親と一緒にいったのでお互いを配慮し、色々聞けないことがあったので少しは残念であった。

外国人介護者を通じて、外国籍労働者の運命は仲介者に握られていて、仕事の質も雇い主の志向によって変わるといことが一層

理解できた。健全な仕事環境とは言いがたい、だが台湾政府はこの事態に対して積極的な態度が見えないのはどういうことだろう。

ii. ホスト側としての感想 (蔡)

I、親は妙に”あなたたちは何のために訪問ですか？”という質問を繰り返した。もちろん、セッティング側として慎重になるのも分かるが、度がすぎる気がした。

II、親は何度も”私たちは合理的な理由があって、合法的な手続きを辿ってアティさんを雇っています。ちゃんと尋ねてくる方たちに説明するのだよ”ということを何度も念をおさえている。

III、家がアティさんに対する待遇どうなの？と聞いて、親はやや感情的な口調でもともと良くしていますのでと返ってきた。

以上の点から、筆者はいくつかのことを推測する。

①台湾において一般家庭で外国籍労働者を雇うのはまだ普遍的なことではない。それゆえ他人から奇妙な目で見られることがある(筆者の親は面子に拘る人間)。

②上の点において、外国籍労働者を雇うだけで悪い噂が出る可能性がある。親はそれを警戒しているのではないかと推測する。だから何度もアティさんを雇うのは合理的で合法だと強調すると思う。

③筆者が”我が家はアティさんをよくしているの”と聞いている時点で、筆者自身もそういう偏見の目で見ていることに気づいた。

(6) 最後に

今回の実地調査では、実際に現場で働いている外国人介護者の話を聞き、その仕事環境を目にすることができた。おかげで、今

まで読んでいた書面資料との比較ができ、さらに働いている本人の言葉もただ資料になるだけでなく、他の資料の証言ともなりえて、今まで集めてきた関連している資料の信憑性を確認することができた。これは大きな成果だと思う。

だが成果を挙げている一方で、同プロジェクトのメンバーも感じていることがある。それは、今回の訪問対象のアティさんがいくつかの情報を出す事を避けている気がする事だ。実は、外国籍労働者には他人に仕事関連の質問された時どう答えるべきかというマニュアルがあるのだ。故に、アティさんもこのマニュアルに沿って、うそはついてないが、いくつかの情報を漏らさないようにしているのだろう。これは、外国人介護者だけでなく、外国籍労働者たちの生活の最も深い部分の「情報の壁」だろう。この壁を築き上げているのは台湾政府、外国籍労働者業者など外国籍労働者の制度に関わってきた組織だ。それゆえ、最も中心となる本当の事情を聞きだすのは容易なことではない。対象法として、本人の言葉と他の資料から比較し、推測してから確証する方法もあるが、訪問対象のご本人に直接会っても、一番深いところの情報が簡単に手に入らない、このことに対するもどかしさは、今回の成果の一方で、残念だと思っていることだ。

(蔡松峰)

4.3. プロジェクトの総括

4.3.1. 学生による総括

1. 蔡松峰

“台湾は最も外国籍労働者の人数と比率が高い国である。”これは台湾大学の社会学系の林萬億教授の言葉だ。以前の私はこの言葉を実感することはない。だが今回の

プロジェクトを通して、この言葉を身をもって実感した。

身近な例をあげると、自分が2014年のいま住んでいる場所の近くにある商店街に行けば、店員の中には東南アジアの人間が混ざっている。駅まで行けばその周辺には外国籍労働者向けの店がしっかりと建っている。だが、このプロジェクトに関わる以前に、私は全く気づいていなかった。自分の視野はまだ狭いと痛感したのである。ゆえに、このプロジェクトが私にもたらしたのは、外国籍労働者はすでに台湾の一部に組み込まれている認知だ。単純労働や、看護など専門知識を必要としない仕事は、段々外国籍労働者たちのテリトリーになりつつあるのだ。

だがその一方、台湾の社会はまだ、この状況を正しく認識していない。ニュースなどのメディアは未だに外国籍労働者を非日常の一部として取り上げている。報道しているニュースは悪い面のニュースが圧倒的に多いのだ。私には一つ印象深いニュースがある。ある中学生の少年が町中の外国籍労働者に暴力を振った。彼の友達はその過程をネットにアップロードして、自慢げに語ったのだ。そのあと補導受けた彼は後悔の意思を見せず、むしろ得意げにこう語る—彼らはわが国の仕事環境を悪くした者たちだ。自分はやつらに制裁を加え正義を主張したに過ぎない—という信じがたい言葉を発した。もちろん、これは彼自身のいい訳だけかもしれないが、しかしこれはこの言葉をいい訳に出来るという考えが、彼の中に存在しているということを示しているのだ。このプロジェクトを通じて自分には分かる、外国籍労働者を取り入れる方針を決定したのは、台湾政府自身だ。この少年のこぶしの向き先は全くの見当違いだ。だがこれらに関わる資料を読

む以前の自分なら、部分的にその少年の考えを賛同していた可能性が高い。これはつまり、台湾にいる外国籍労働者たちは一体どういう立場にいるのか、台湾の民衆は正しく認識していない、そして彼らを認識するための情報も手に届く範囲においていない、という状況を示す証拠の一つなのだ。

ニュースなどのメディアは外国籍労働者を問題を起こすものとして取り上げる;政府はこのあたりに無関心;警察は彼らを犯罪予備軍として扱い、休日には監視強化もしている、そして民衆は彼らをただの厄介者として扱う。これは外国籍労働者が日常になりつつあるの国の現状であるべきか? 答えは、もちろん否だ。外国籍労働者はどういう経緯で台湾に来たか、その影響は? 彼らの必要性はということか? 台湾政府はこれらのことの重要性を認識し、教育に組み込むか、メディアに正しい報道をさせるかなどの方針をはやく取り入れるべきだ。これが、このプロジェクトで得た私の結論です。

2. 李秀貞

今回、東アジアプロジェクトに参加しながら私の中で一番変わったところは、世界国々で働いている外国籍労働者や、国際結婚者の生活に注意を払うようになったのである。大学時代工業デザインを専攻した私が、台湾の日本語学科で外国籍労働者や、外籍配偶に対して勉強するとは私自身も想像したこともなかった。今まで興味も関心もなかった分野に勉強し始めたことで私なりの視野もだんだん広くなり、世を見る目が変わった。

今私が暮らしている台湾では多くの外国人がいる。私もその中で色々な役割を持っている。私は学校では「外国人留学生」である。また家庭では「外籍配偶」であり、バイトな

どをするときは「外国籍労働者」でもある。私も「外国人留学生」の身分以外には彼・彼女らと同じ身分を持っている。しかし、私が今まで知らなかった彼・彼女らの世界が存在し、それが台湾ではマイナスイメージとして見られている。アジアで他の国よりも早めに外国人を受け入れた台湾では早くから外国人関係の社会問題が起こっていた。それを解決するために政府を含め、色々な NGO や NPO などが手を組んでいる。しかし、その割には彼・彼女らへの認識はいまだによくはないのも事実である。彼・彼女らに対するサポーターも大切な活動の一つではあるが、それと同時に社会的な認識を変える活動も教育の面から必要だと思う。どこの出身者か、どのような顔の形をしているかがその人を判断する基準になるよりも職業には上下がないという認識の基でこの社会でどのような役割を果しているかを基準として人を見るのも重要だと思う。自分なりにはこのような考えをするようになったのもこのプロジェクトのおかげであると思った。

3. 玉那覇ももこ

2011年の日曜日、初めて第一廣場を訪れた。台湾に住み始めて2か月ほど経過した頃で、それが台湾で初めて外国籍労働者を“意識”した瞬間でもあった。人が密集し、そこに台湾人の姿は無く、台湾人が“浮く”ほど異国の雰囲気は漂っていた。店内に入ると、入り口同様に大勢の人で溢れかえり、それぞれの時間を楽しんでいた。また、第一廣場に漂う東南アジアの雰囲気は、これまで見聞きしてきた外国籍労働者と異なっている様にも感じた。大学時代にフィリピンを訪問した際、エンターテイナーとして来日した方の不当な契約や結婚・離婚のお話を伺った事が

あり、それと比較して台湾に住む外国籍労働者を見ると「自由」に見えたからである。日本では管理・隔離されているイメージがあり、休日を楽しむ姿がこれまでお話を伺った方達とは異なっていた。その事もあり、台湾で「外籍勞工」と呼ばれる人達がどのような経緯で来台し、どのような労働環境で働いているのかについて詳しく知りたいと思い、東アジアプロジェクトへの参加を決めた。

東アジアプロジェクトへ参加して一年、様々な場所を訪問しながら直接お話を伺うことで、本を通して得た知識が実際に外国籍労働者・配偶者の日常とリンクし、より現実的で身近な問題へと変化していった。まず、「外籍勞工」の支援を行っている TIWA を訪問した事で台湾における外国籍労働者の現状を知る事となった(4.2.1 参照)。日本では、日系人以外の外国人に関しては表向き受け入れを行っていない。しかし、日本でも台湾と同様に外国籍労働者として日系ブラジル人が製造業に導入され、また 2008 年からは外国人介護士(資格取得必須)の導入も行われており、現在の台湾の姿は日本と重なって見える。しかし、このような人の移動は台湾と日本だけではなく、全世界で行われている。

国際労働力移動と言う場合は、単純労働の職種にしか就けない未熟練労働力の移動を意味し、この労働力こそが多くの発展途上国にとって最も国際競争力のある商品となっている(伊豫谷, 2001)。そのためか、台湾と日本においても同様に製造業は外国籍労働者を多く雇用している。

また、移民労働を欠いては経済活動の成り立たない国が形成されてきている。送り出し国では、対外バランスを移民送金へと依存している(伊豫谷, 2001)。送り出し国の移民送金への依存もあるが、台湾や日本にお

いても既に労働移民(外国籍労働者)無しには経済が成立しない。なぜなら、国の産業支えている製造業において日本では日系ブラジル人の多くが従事し、日本の大手企業の「Made in Japan」を支えている。また、総人口 2300 万人台湾では、26 万 5741 人(2013 年末現在)もの外国籍労働者が製造業に従事し、「Made in Taiwan」を支えている。それにも関わらず、金戸(2009:255)によると、外国籍労働者の場合、「定住化させない」ことが台湾政府の方針であるため、外国籍労働者は、雇用主の絶対的支配下に置かれることになる。

そのため、外国籍労働者はいつまで経ってもよそ者なのである。なかなか自らの意見を述べる機会も少なく(台北では集会がある)、特に台中においては全く無いと言っても良い。

毎週末、大学の近くでも多くの外国籍労働者とすれ違う。それにも関わらず、彼らと交流する事は全くない。同じ空間に居ながらも互いに交わる事の無い壁がそこにはあるようだ。そして、彼らを「意識」する度に何処か違うと再認識し、言語・人種・国籍の違いが如何に人々を分類しているかを思い知らされる。それがアンダーソンの言う「想像の共同体」だと分かっている、私は日本語を話す日本国籍だという事を意識してしまう。しかしながら、東アジアプロジェクトを通し、流れている情報だけでなく、実際に見聞きする事の重要性を実感する事ができた。なぜなら、怖いと思っていた人が実は優しくかったという経験は誰しもある様に、流れている情報からでは得られない彼/彼女らの考えや人柄が直接伝わり、一般的な情報が必ずしも正しいわけではない事を実感出来たからだ。この体験をただ実感するだけでなく、出来る発信を

していく事を東アジアプロジェクトでは行ってきた。しかし、なかなか踏み込んだ関係構築が出来なかったようにも思う。これで東アジアプロジェクトは一旦閉幕となるが、今後再開の機会があれば継続して関係性を作る様な関わり方を模索できればと思う。

余談ではあるが、日本語教師をしている友人から沖縄ではネパールからの語学留学生が多いと聞いた。多くの留学生が農業や漁業のアルバイトをしており、働く事を目的として来日しているという。沖縄では語学学校がネパール政府と連携し、ネパール人の受け入れを行っているそうだ。以前、季節労働者として韓国人などが沖縄でサトウキビ刈りをしていたのは耳にした事がある。しかし、それは過去の事ではなく現在も変わらずに見えない所で沖縄の漁業と農業を外国籍労働者が支えているという事ではないか。この東アジアプロジェクトを通して学んだ事を、身近な問題から捉え直す事に生かしたいと思う。



ベトナム語で書かれた看板。
ベトナム語で書かれた看板。カラオケ店の中には大勢の人。



タイ語表記の「味の素」。



フィリピンのニンニク味のお菓子。

4.3.2. 教員による総括

2012年度は、正式登録4名と、ここ数年で最も多数の学生が参加を表明してくれた。また、前年からの活動を継続してくれている参加者、筆者の碩士班での担当授業である「移動與溝通」の受講生なども随時加わり、多様な活動が展開された。

本報告で詳しく触れられているもの以外にも、筆者の担当する「移動與溝通」の授業と連動したかたちで行われた2012年11月11日の台中駅前の外国籍住民集落地・集落地訪問、2012年12月17日の台中工業区集落地・集落地の訪問および台中市西屯區公所の戸籍係職員への帰化申請に関するインタビュー等の活動においても、東アジアプロジェクトからの積極的な参加が目立った。

2012年度には、日本語言文化學系の碩士班の教學活動の重点化の一環として、活動計劃の活動について(1)公開式の成果報告、活動報告を一年間のうちに少なくとも一度行うこと(2)活動報告の論文を學系紀要に投稿すること、の二点が課目の正式な活動として取り入れられることとなった。このこととも連動して、2012年度の東アジアプロジェクトの活動は「経験を文字化する」ということに例年以上に取り組むことができたように思う。奈良女子大学中山ゼミと合同のワークショップ、ブログの開設、紀要への投稿などは、プロジェクト参加者が碩士班に所属するなかで達成すべき目的の一つである「さまざまなかたちでの研究成果の公開」にも少なからず貢献するものと思われる。

5. 結びにかえて 私たちは何をを目指したのか？何を達成できたのか？

第3節の6年間の活動の紹介からわかるように、東アジアプロジェクトは参加者の人員構成や意思、希望などによって、その活動内容を少しずつ変えながら継続されてきた。第2期、3期までは、多様な出自をもつ人々の交流のための「場所」「空間」づくりを指向しその長期的達成目標として「NGO/NPO」の設立に向けた情報収集、活動ノウハウの習得、といった活動方針を掲げていた。そうした指向性は4期5期ではやや変化し、移動を経験している人々とのより直接的な交流の方へとシフトしていったように思う。第6期は、自省的に参加者自身が自分の立場も意識しつつ、「台湾における外国籍住民に対するステレオタイプのイメージ形成の根源とはなにか？」ということを考えることとなった。

冒頭で述べたように活動計劃は「従来の教育や研究において自明とされてきた「教

える側」-「教えられる側」、「研究者」-「被調査者」といった枠を取り外し、教員、学生、地域の人々がそれぞれ主体的に参加し活動すること-共同作業-」を前提としている訳であるが、東アジアプロジェクトにおいては共同作業の結果としての具体的な「成果物」はあまり提示できなかったように思う。そのようななかでも、第2期の「外国人の営みが見えてくる・感じられる地図」の作成や第6期に開催されたワークショップなどは、移動者のことを知ってもらうための成果物としてそれなりの意味があったといえよう。

東海大學日本語言文化學系のホームページの大学院-カリキュラムの項目には次のように謳われている。

現実に交流を作り出し、そこで起こる問題に対処しながら成果を生み出すプロジェクトへの参加を必修とします。本大学院は、交流の実務能力養成を目標に掲げるものであり、ここで述べるプロジェクトは、その意味で本大学院での学習の要となる部分になります。

(<http://japan.thu.edu.tw/jp/body.htm>)

筆者自身も「東アジアプロジェクトでの活動が将来の社会実践につながるとすればこれほどすばらしいことはない」と考えていた。一方で、「なぜ学術機関に所属しながら社会実践を目指すのか？」「実務経験を重視するのであれば、学術機関ではなく、社会への所属をこそ促すべきではないか」という思いが常にあった。また、筆者自身の「社会貢献」や「実践」を語らずして、学生の社会貢献を促すことは可能なのか、という点についても常に自省を迫られた。

筆者が研究発表のかたちでいくつかの文章を書くなかで、本プロジェクト内外での交流や、軋轢も含めた人との関わりを通して感じた苦悩も内包しつつ形作られてきた思考・思想が、結果的に執筆活動の大きな支えとなったように思う。交流を調査活動のようなかたちで「消費」するような研究だけはするまい、と心がけてきたつもりであった。また、筆者自身も「移動者」のひとりであることを意識し、自省的・内省的な記述につとめたつもりである。その結果として、筆者のウェブサイトや東アジアプロジェクトのブログといった場を利用した活動紹介は精力的に行えたものの、いわゆる「研究」成果としては量的にも質的にも「ものたりない」ものに見えるかもしれない。遅筆・怠惰の言い訳とならぬためにも、これからの行動が大切になる。

思えば、東アジアプロジェクトは、参加者たち自身がそれぞれ様々なかたちでの移動を経験している、そのような活動体であった。日本、韓国などにルーツをもつ者、長短期留学経験者、「跨国婚姻」の経験者、華僑・華人等々。筆者自身も日本出身でフィリピン研究を経て台湾で教鞭をとる身であった。私たち参加者自身が常に「東アジア」的な多様性を内包していたと言える。活動を行うなかで、他者と関わるときに求められることは、社会の構成員としての自分自身の在り方・立ち位置を十分に意識することではないか、ということに改めて教えられたように思う。筆者の人間的な至らなさ故に、人間同士の衝突も多く、コミュニティ形成やコミュニケーションに関わる者として人的資本とか社会関係資本といったことの大切さを学んでいるからこそ、人間関係の形成に対しては忸怩たる想いを今でも多く抱えたままである。

こうした点について答えの出ないまま2012年度末をもって東アジアプロジェクトは碩士班の正式授業開講単位としては消滅することとなった。

しかし、人と人の関わり自体は教育機構の活動とは別に継続されている。この活動を通して出会った人たちと家族ぐるみの交流を継続している修了生もいる。筆者も交流を継続させてもらっている。今後、東アジアプロジェクトの活動に興味を持つ参加学生が現れれば、本プロジェクトが學系の正式課目として再び登場する可能性も全く無くなった訳ではない。8月より始まり7月で終わるという大学の「アカデミック・カレンダー」と、人々の実際のつながり・交流は、時には相容れない・添わない場合がある。正式課目の一部としての活動を終了した今だからこそ、今後の活動の在り方が大切になる、といえるだろう。これまでの交流の経験や継続から得られたもろもろの「無形の成果」が、少なくとも東アジアプロジェクトに関わった参加者たちの今後の「生」に、できれば「善き生」に好影響を与えてくれることを願ってやまない。

幸いなことに、學系のウェブサイトには東アジアプロジェクトの紹介がまだ掲載されている。同ページには、筆者のウェブサイトおよび学生作成のブログへのリンクも掲載されている。これらのリンクには、東アジア歴史と人の移動プロジェクトのこれまでの活動の情報および参加者の活動報告が掲載されている。読者の皆さんには、ぜひ閲覧していただき、ご意見やご感想、参加希望など伝えていただければ幸いである。

(松永稔也)

付録

【図表 1】 2004 年度～2010 年度の小中学校の学生数及び外籍子女の比率

年別	総合学生数			小学校			中学校		
	人数	比率		人数	比率		人数	比率	
2004	2840460	46411	1.63	1883533	40907	2.17	956927	5504	0.58
2006	2750737	80167	2.91	1798393	70797	3.94	952344	9370	0.98
2008	2629429	129917	4.94	1677453	113182	6.75	951976	16735	1.76
2010	2439258	176373	7.23	1519456	148610	9.78	919802	27763	3.02

(参照:教育部「外籍配偶子女就讀國中小人數分布概況統計」99年度)

【図表 2】 2007 年度～2013 年度 台湾籍配偶者と東南アジア配偶者の婚姻件数

年別	本国籍 婚姻件数	本国籍 離婚件数	東南アジア 婚姻件数	東南アジア 離婚件数
2007 年	110341	47428	6950	3844
2009 年	95185	44066	6009	4632
2011 年	143811	42854	5212	4723
2013 年	128144	41513	4823	4112

(参照:内政部入出国及移民署「我國人與外籍人士結婚統計」「我國人與外籍人士離婚統計」統計資料)

【図表 3】 台湾に滞在する「外籍勞工」数 (国籍別・東南アジア中心) ²²

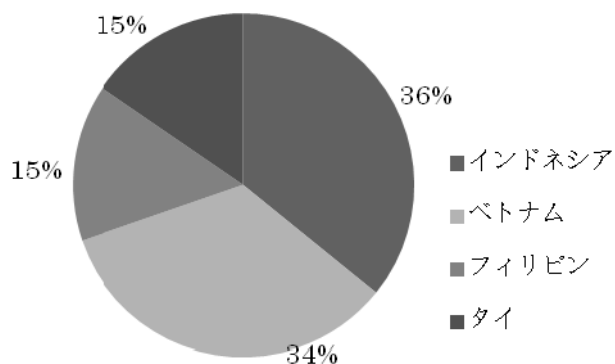
	合計	タイ	フィリピン	インドネシ ア	ベトナム
98 年末	351016	61432	72077	139404	78093
99 年末	379653	65742	77538	156332	80030
100 年末	425660	71763	82841	175409	95643
101 年末	445579	67611	86786	191127	100050
102 年末	489134	61709	89024	213234	125162

※1 合計には、タイ、フィリピン、インドネシア、ベトナム以外の国籍も含んでいる。

【図表 4】 台湾における産業・社会福祉「外籍勞工」の数 (人)

県・市 別	総計	産業外国籍労働者				福祉外国籍労働者		
		合計	農・林・漁・ 牧場(船員)	製造業	営造業	合計	介護職	家事労働
総計	489134	278919	9788	265741	3390	210215	208081	2134
新北市	69703	35715	1889	32363	1463	33988	33689	299
台中市	67274	44423	133	44047	243	22851	22631	220
桃園県	82666	64813	133	64416	264	17853	17682	171

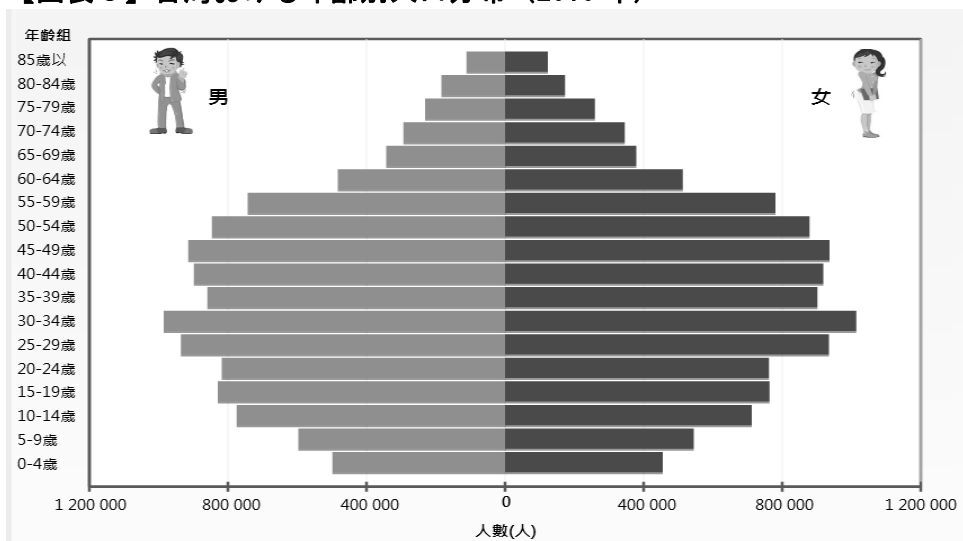
【図表5】台中市の外国籍労働者の割合（国籍別）



合計	インドネシア	ベトナム	フィリピン	タイ
67274	24101	22802	9973	10398

行政院勞工委員會(職業訓練局)の資料を参考に作成
 (<http://www.evta.gov.tw/home/index.asp> 2014年1月29日参照)

【図表6】台湾における年齢別人口分布（2010年）



(台湾行政院より 2012年10月5日)

註

1. 当時公開を始めた筆者のウェブサイトには次のような記述が見られる。「プロジェクトとは、多元文化交流のための理論と実践を学ぶことをめざしている東海大学日本語文学系が特に重視している「授業単位」です。とても大事なことです、という点は何となく解っているのですが、それをどのようにこの「授業」に関わる人たちに伝えるか、また「授業」を飛び越えて多くの人たちに伝えていくのか、という点に関しては皆、五里霧中(?)という感じもします。」この問いは、以降6年間、常に筆者にとって(あるいは参加学生にとっても)中心的なテーマとなり続けた。
2. 筆者の個人的なメモには、「外籍勞工」「外籍配偶」の出身国の諸言語、台湾の諸言語、日本語等をおたがいに学び合う「言語教室」の計画もある。こうした活動は、実現こそしなかったものの、まだまだ開講の可能性については検討の余地があるように思われる。いくつかの高級中学校では、「外籍配偶」の子どもたち(新台湾之子)の増加という背景も考慮し、第二外国語教育に東南アジア諸言語を取り入れつつある。そうした活動との連携の可能性も考えられる。
3. このツアーのフィリピン滞在においては、マニラにて布教活動を行う貴格教会、Manila Friends Churchの陳光道牧師、謝碧齡牧師のご夫妻とご家族、教会関係者の皆さんに大変お世話になった。感謝の意をここに記しておきたい。
4. 内政部入出国及移民署「各縣市外裔、外籍配偶人數與大陸(含港澳)配偶人數按證件分」2014年1月の統計資料を参考にし、百の位を四捨五入した人数。
<http://www.immigration.gov.tw/ct.asp?xItem=1247109&ctNode=29699&mp=1>
5. 日本や韓国からの配偶者は「日本媳婦」、「韓国媳婦」という別の呼び名で呼ばれるが「外籍配偶」は元々は「外籍新娘」と呼ばれ、それが「外籍配偶」へと変わり、最近では「新移民」へと呼称が変化してきている。
6. 外籍配偶の結婚仲介サイトに直接ベトナム 25 萬(台湾元)、インドネシア 30 萬(台湾元)と料金が載っている。
7. 「外籍配偶」を含む全ての外国籍を擁する配偶者のこと。
8. 以下、図表については本文末付録を参照。
9. 教育部「外籍配偶子女就讀國中小人數分布概況統計」99年度を参照。
10. 東南アジア出身の配偶者の子どもや、中国出身の配偶者の子どものことを指す。日本や韓国出身の配偶者の子どもの場合はハーフと呼ばれる。(参照:楊艾俐「新台灣之子」2003. 第 271 期)
11. 台語不輪轉 新台灣之子怕被排擠 2012 年 4 月 5 日 華視 CTS
<http://news.cts.com.tw/cts/life/201204/201204040973375.html>
12. 「新移民家庭服務中心」は「外籍配偶」を中心とした悩み相談や、家庭内暴力などまで、さまざまな問題に関する手助けと、台中第一服務站の管理区の各戸政事務所を拠点として、「外籍配偶」が必要とする書類の申請を手助けするために、台中第一服務站と同様に「行動列車」の活動をしている。
13. 投稿:跨國台灣媳婦的婚姻 勵馨基金會龍山婦女服務中心主任の廖雪貞 参照
<http://anan1.webnow.biz/chinawomen/paper/a1.htm>
14. 内政部入出国及移民署統計資料参照
15. 主に東南アジア籍の外国籍労働者を指して言う言葉。
16. 「攻陷」とは台北駅が外国籍労働者などによって占拠された意味。(黃朝貴:我是乘客心聲 沒有種族歧視)辛啓松 2013 年 08 月 11 日報道
<http://www.appledaily.com.tw/realtimenews/article/new/20130811/240729/>

17. 内政統計處による『103 年第 5 週内政統計通報(102 年底在我國之外籍人士統計)』を引用し、翻譯した。<http://www.moi.gov.tw/stat/index.aspx> 2014 年 1 月 29 日参照)

18. 内政統計處による『102 年第 5 週内政統計通報(101 年底在我國之外籍人士統計)』から抜粋した。
(<http://www.moi.gov.tw/stat/index.aspx> 2014 年 1 月 29 日参照)

19. お話を伺ったのは 2013 年 1 月 13 日と 15 日であった。また、ランダムに声を掛けた為、不審な顔をする方が多かった。しかし、話し続けると快く様々な話を伺う事ができた。インタビュー中に表情が変わる瞬間があり、不信者を見る態度から心を少し開く瞬間は非常に嬉しかったのを覚えている。

20. 本ツアーについては、筆者のウェブサイトにて「2012 年『台北 外国籍の人びとの暮らしをたどるツアー』の報告ページ」として写真も含めてより詳しい記録を掲載している。
(<http://web.thu.edu.tw/toshiya/www/2012-taipei-tour.html>)。このページの文末には、東アジアプロジェクトの活動の在り方・意義について参加学生たちとともに悩む様子も記されている。

21. 台中の服務中心は、2006 年より台中市政府の委託を受け台中市に暮らす外籍配偶めの事業を開始している。先述のとおり現在台中には北屯、大甲、豊原、大里の各区に拠点がある。サービス内容は、「社会に対する多角的な文化の宣伝活動(移民者の文化)」「新移民の季刊の発刊」「電話による相談」「新移民の心理カウンセラー」「新移民の劇団への支援」「文化大使の育成」「家庭内の支援」など多岐にわたる。

22. 内政統計處による『103 年第 5 週内政統計通報(102 年底在我國之外籍人士統計)』からタイ、フィリピン、インドネシア、ベトナムを抜粋・翻譯し、作成した表である。
(<http://www.moi.gov.tw/stat/index.aspx> 2014 年 1 月 29 日参照)